

第9回せとうち美術館ネットワーク特別講演会（平成29年12月17日）

沖縄の伝統陶芸「やちむん」に学ぶ幸せのヒント

沖縄科学技術大学院大学 研究員 佐二木（さじき）健一

<略歴>

米国ウィスコンシン大学卒（遺伝学）。千葉県警勤務の後、奈良先端科学技術大学院大学にて博士号取得。2009年より沖縄科学技術大学院大学（OIST）にてスタッフサイエンティストとして研究を行う細胞生物学者。一方、沖縄伝統陶芸「やちむん」に惹かれ、読谷村の北窯・松田米司工房に弟子入り。科学者としての立場から、北窯のやちむん作製技法をデータ化・可視化したいと考え、分析に着手。分析結果は2015年5月～7月にOISTで開催された「北窯 x OIST ～伝統と科学～」にて展示発表した（下図）。

<要旨>

ゲノム編集、人工知能、ロボットなど日々進歩していく科学技術は、私たちの生活や考え方を大きく変えつつある。叶わなかったことが現実となり、夢を大きく広げる科学技術だが、一方で人の能力を遥かに超えていく進歩にどんな未来が待っているのか不安になることもあるのではないだろうか。

私は生命科学の研究を行なっているが、日々触れる科学技術の驚異的な発展スピードに、正にそんな不安を感じていた。そんな時に出会ったのが、沖縄の伝統陶芸である「やちむん」だった。昔ながらの集団生活の中、地域のつながりから生まれる器の数々は、大切なことを教えてくれた。ゆっくりと時間をかけて陶工たちが身につけ、伝えていく人間性は、強力な科学技術を使いこなす上で最も必要な資質である。今後、科学技術が牽引する未来において、技術を正しく使うための資質を育み、さらには能力を超されつつある人間がその存在意義を見失わないためにも、人が人として生きることの価値を教えられる工芸・美術教育はこれまで以上に重要になってくる。

やちむんから学んだ幸せな未来へのヒントと、それを今後に生かすために行なっている美術科教育に携わる先生方との分野を超えた取り組みを紹介したい。

北窯×OIST～伝統と科学
沖縄の焼き物「やちむん」の秘密に迫る

幾世代にもわたり、沖縄の陶工の技術は親方から弟子へと直接受け継がれてきました。沖縄独自の美しい焼き物「やちむん」の作り方を説明する教科書はありません。熟練した陶工は手触りや色彩、炎の形などを手掛かりに作品を生みだします。しかし今日では、現代的手法を取り入れる陶工も少なくありません。さらに、陶土となる地元の粘土資源の減少により、伝統的な技法に関する知識が沖縄から失われつつあります。

そこで、沖縄科学技術大学院大学(OIST)と読谷村やちむんの里の読谷山焼北窯が協力し、初めて沖縄陶芸の伝統的手法を科学的に解析・記録しました。OISTの研究者らは最先端機器を駆使し、北窯のやちむんに使われる様々な材料や技法を研究しました。

地元の粘土中のどのような鉱物が、焼き物一点一点に違いを生み出すのか。低温で焼き上げた方が仕上がりの良い釉薬と、窯の火近くの高温で焼き上げる必要がある釉薬があるのはなぜか。熱や酸素、釉薬の化学組成をどのように組み合わせれば、望み通りの青緑の色合いが生まれるのか。

このような疑問に対して私たちが得た答えは、時間とともに忘れられたいにしへの技法を再生する。手がかりとなり、今ある伝統を後世に確実に残す術を与えてくれます。

「北窯×OIST- 伝統と科学」は、皆様をこの芸術と科学の特別なコラボレーションにご招待します。

北窯×OIST
～伝統と科学～
KITAGAMA-OIST: Tradition and Science
May 18-July 31 2015
9:00AM-5:00PM